

研究主題

**確かな学力を身につけ、生き生きと主体的に学習する子どもを育てる
— 文学的文章における「読みの力」を高める授業づくり —**

1 研究主題について

① 主題設定の理由

本校では、この2年間「確かな学力を身につけ、生き生きと主体的に学習する子どもの育成」を目指し、「説明的文章における読みの力」を育てる授業づくりに取り組んできた。1年次は、説明的文章の読みを喚起する教師の働きかけを探ることに重点をおき、2年次は、説明的文章の授業改善を行ってきた。その結果、1年次においては、単元の導入を工夫し、学習の目的を明確にするなどの工夫を行うことで、児童の心を説明的文章に向けさせ、学習意欲を継続させることができると分かった。2年次においては、各学年における児童に獲得させたい読みの力を具体化することができた。そして、その読みの力をつける授業の方法を綿密な教材研究を行うことで探ってきた。教材に隠された論理（教材の特性）を教師がまず理解し、それを知った上で単元構成や授業展開を考えるようになったし、力をつけるための教材の工夫も行ってきた。

本年度は、さらに「読みの力」を育てるもう一方の文学的文章の授業についても、児童に読みの力をつけることができる授業とは何かを追求していきたい。両方の授業改善を行うことで、双方の授業づくりが向上すると考える。また、2年間の研究成果を文学的文章の授業づくりにも生かし、積み上げていくことができるであろう。「読む」能力の育成を引き続き図ることで、児童が主体的に学習に取り組み、他の考え方から学びながら自己の考えを深めていく営みを通して、思考力を育成することにつながると考える。思考力を育成するために有効な文学的文章の授業づくりに取り組んでいきたい。

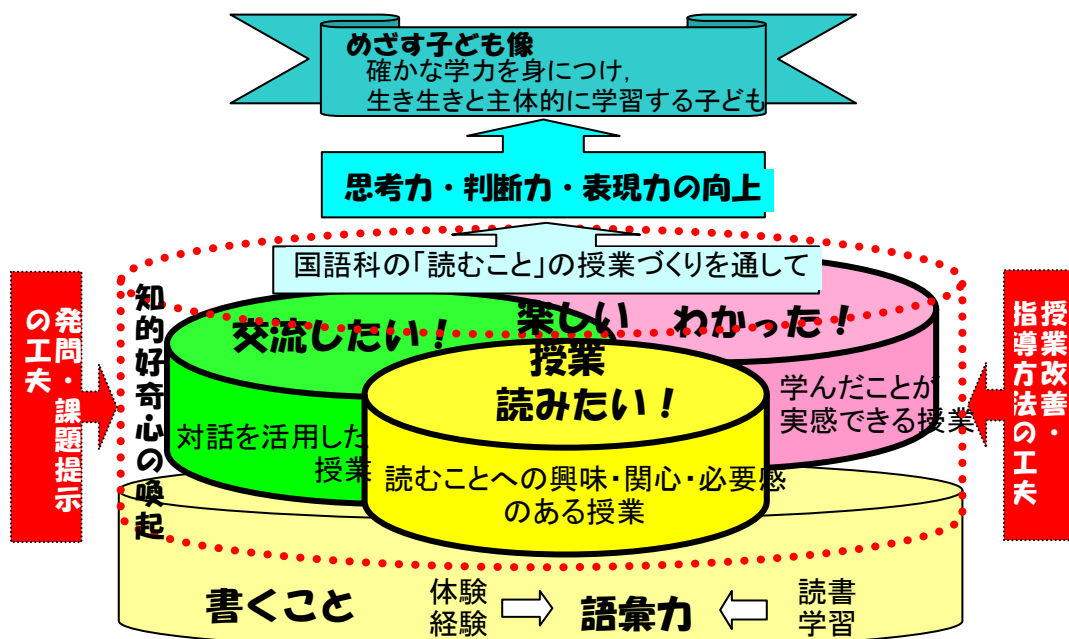


図1 テーマ「文学的文章における、読みの力をも高める授業づくり」

② 文学的文章で育てたい読みの力

新学習指導要領に示されている力を確実につけることが必要である。なかでも、第1学年から第4学年のウ、第5学年及び第6学年のエは、文学的文章でつきたい力である。

学年	第1学年	第2学年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
新学習指導要領目標	(3) 書かれている事柄の順序や場面の様子に気付いたり、想像を広げたりしながら読む能力を身につけさせるとともに、楽しんで読書しようとする態度を育てる。	(3) 目的に応じ、内容の中心をとらえたり段落相互の関係を考えたりしながら読む能力を身につけさせるとともに、幅広く読書しようとする態度を育てる。	(3) 目的に応じ、内容の中心をとらえたり段落相互の関係を考えたりしながら読む能力を身につけさせるとともに、幅広く読書しようとする態度を育てる。	(3) 目的に応じ、内容の中心をとらえたり段落相互の関係を考えたりしながら読む能力を身につけさせるとともに、幅広く読書しようとする態度を育てる。	(3) 目的に応じ、内容や要旨をとらえながら読む能力を身に付けさせるとともに、読書を通して考えを広めたり深めたりしようとする態度を育てる。	(3) 目的に応じ、内容や要旨をとらえながら読む能力を身に付けさせるとともに、読書を通して考えを広めたり深めたりしようとする態度を育てる。
文学的文章の解説に関する指導事項	ウ 場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むこと。	ウ 場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むこと。	ウ 場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むこと。	ウ 場面の移り変わりに注意しながら、登場人物の性格や気持ちの変化、情景などについて、叙述を基に想像して読むこと。	エ 登場人物の相関関係や心情、場面の様子などについて描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめること。	エ 登場人物の相関関係や心情、場面の様子などについて描写をとらえ、優れた叙述について自分の考えをまとめること。

2 文学的文章の指導

① 文学的文章（文学作品）とは

文学的文章は、新学習指導要領では、文学的な文章と表現されている。説明的な文章が現実の事柄を論理的に組み立て、受け手に納得させるように書かれた文章であるのに対して、文学作品には人間の生活や行動が描かれており、現実とは異なる虚構の世界を描いた文章である。

これまでの国語教育の中でも、文学作品は教材として取り上げられ、指導方法が豊富に開発されており、小学校で取り扱う文学教材は、次のジャンルが多い。

- ① 物語教材 ② 小説教材 ③ 民話教材 ④ 童話教材 ⑤ ファンタジー教材
⑥ 詩教材 ⑦ 短歌・俳句・川柳教材 ⑧ 劇・脚本教材 ⑨ 日記教材

本校では、①②③④⑤を中心に研究を進めていくこととする。

② 文学作品の指導と読む力

浜本純逸先生による

文学作品の指導においては、文学作品を楽しく読みながら、結果として文学作品の読み方が身に付くようにしなければなりません。と同時に、文学作品の持つ価値を読み取る力を身に付けることが必要であると考えます。

このことから、文学的文章を読む力とは、文学作品を楽しみながら読み、文学作品の価値を読み取る「文学的認識力」と文学作品の読み方を身に付ける「文学作品を読み解く力」から成るものであるととらえることができる。

③ 文学作品を読む力と文学体験

文学作品の指導において、文学的認識力として、文学体験する力を育てていきたいと考えている。文学作品を読むということについて、浜本純逸先生は次のように述べている。

浜本純逸先生による

文学作品を読むということは人物とともに虚構の世界に転生して、これまでの生き方とは違った生き方を生きることである。自己と異なる生を生きることによって、これまでの自己と矛盾葛藤を生じたり、これまでの生を洗い流すような再生の体験をしたりすること。

また、難波博孝先生は、次のように述べている。

難波博孝先生による

○文学作品を読むということは、「文学を問いとして受けとめること」つまり、「作者が読者に問いかけた問い」を読み取り、その答えを探すことである。具体的には、「なぜ、主人公はそのような行動をとったのか。」「主人公は、幸せだったのか。」「生きるとはどういうことか。」など作品を読んで、自分の心の中に生じた問いを見つけ出し、その問いに対する答えを見つけながら読むことである。このように文学作品を読むと、作品の持つ力と問いにより、自分の生き方・考え方に関わるものが産み出される。

難波博孝先生による

○文学作品を読むということは、文学に書かれていること（叙述）をもとに、書かれていないことを推測し、頭の中に虚構の世界をつくること。さらに、その虚構の世界中で、叙述をもとにしながら、作品中の出来事を頭の中に展開すること（解釈）。

○文学作品は、「価値の転換の可能性」を体験させてくれるツールである。

したがって、「文学的文章を読む力」とは、文学作品に基づくものの見方・考え方を体験（文学体験）させることを通して、自分自身の価値の転換を引き起こさせる力、つまり「文学的認識力」と、「作品を読み解く力」を身に付けさせるものであるととらえることができる。本年度は、その内の基礎的・基本的な「作品を読み解く力」を身に付けさせる指導を重点的に行いたい。

3 研究仮説

- 教材の特質を分析し、読みとりの観点を明確に示して、作品を読み解く力を身に付けさせることは、読みの力を高める授業改善の方策として有効であろう。

4 研究・取り組みの内容

- ・ 学習指導要領に示されている読みの力（文学的文章）の具体化
- ・ 教材の特質の分析と授業づくり

読みとりの観点を明確化

読みを支える用語

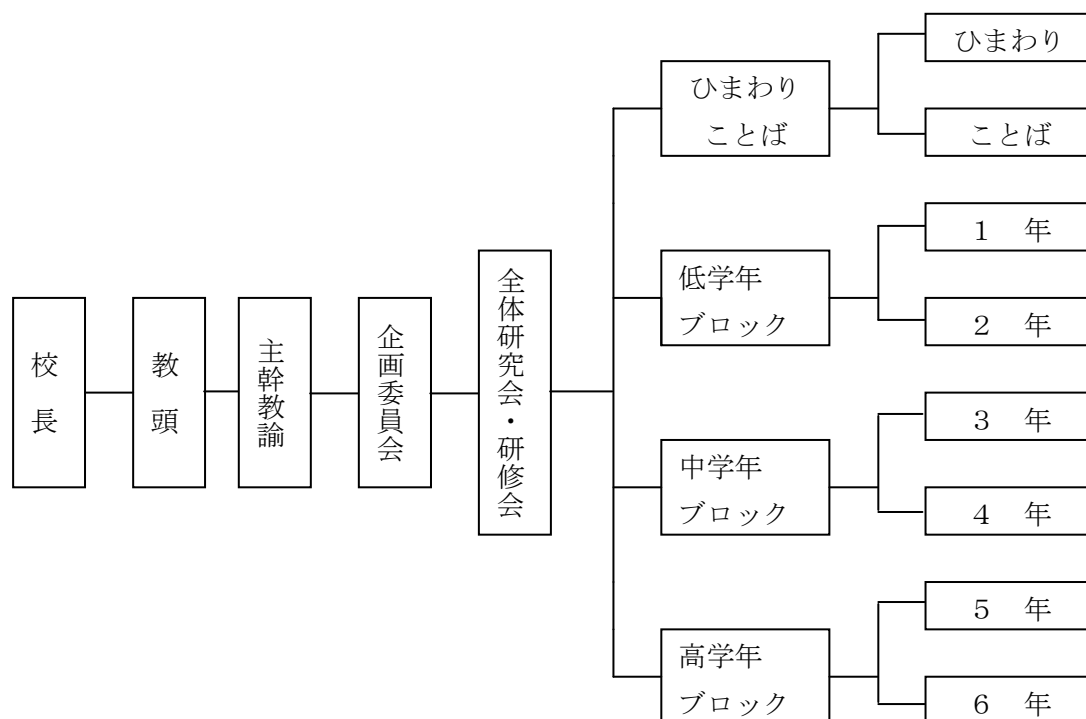
5 研究の方法

- ・ 文学的文章で育てる読みの力の年間指導計画を立てる。
- ・ 教材の特質の分析。
- ・ 授業実践を分析・考察し、改善を図る。

6 検証の方法

- ① 読みの力の変容を見取る。(例) アンケート、一口感想、ノート、ワークシート
事前・事後テスト、初発・まとめの感想
 - ・ 単元ごとの見取り
 - ・ 年間を通しての見取り
- ② 授業実践の分析を行い、授業改善のための手立てと児童の反応との関係を分析する。

7 研究推進組織



・ 研修会

* 小・中連携教育研究会